



Title	Nanostructures and magnetism of Co thin films on Au(001) studied by STM, MCD and PEEM
Author(s)	宮町, 俊生
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/48824
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名 宮町俊生
 博士の専攻分野の名称 博士(理学)
 学位記番号 第22119号
 学位授与年月日 平成20年3月25日
 学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
 基礎工学研究科物質創成専攻
 学位論文名 Nanostructures and magnetism of Co thin films on Au(001) studied by STM, MCD and PEEM
 (STM、MCDおよびPEEMによるAu(001)面上Co薄膜のナノ構造および磁性に関する研究)
 論文審査委員 (主査)
 教授菅 滋正
 (副査)
 教授多田 博一 教授鈴木 義茂 教授田中秀和

論文内容の要旨

近年スピントロニクスデバイスや超高密度磁気記録媒体の開発のためのナノ磁性材料の研究が盛んに行われている。磁性体はそのサイズがナノスケールまで小さくなるにつれこれまでに見られなかった新奇な物性を示すことが知られており、ナノメートル分解能の構造評価を組み合わせたナノ磁性体の磁化分析が必要不可欠となっている。本研究では、基礎物理の面だけでなくナノテクノロジーへの応用の観点からも関心が高まっているAu(001)下地面上のbcc Co薄膜のナノスケールでの磁性と構造の相関関係を明らかにすることを目的としている。まず走査トンネル顕微鏡(STM)および低速電子線回折(LEED)を用いて異なる2つの成長条件(室温成長および室温成長後約230°Cアニール)におけるbcc Co薄膜の表面構造およびモフォロジーの詳細を調べた。成長条件が(i)室温成長の場合にはbcc CoがAu(001)上にエピタキシャル成長し、(ii)室温成長後230°Cアニールの場合には、bcc Coが長方形型に島状成長することがわかった。走査トンネル顕微分光測定(STS)より約3単原子層(ML)以下のアニール後の試料においては試料表面に下地Auの表面偏析によるAu surfactant layerが存在することが考えられる。膜厚の増加に伴い、アニール後の試料は表面構造が(1×2)構造やc(2×2)構造へと変化することが確認された。これらの現象の発現機構はAu原子のdiffusion limitに関連があると思われる。次にアニール温度や蒸着速度等の成長条件や膜厚を厳密に制御することにより様々なサイズ・形状のナノ構造を作製し、台湾放射光施設NSRRCにて軟X線磁気円二色性(XMCD)測定を行い、bcc Co薄膜の磁気構造の解明を試みた。スピノン・軌道磁気モーメントに強いサイズ・形状依存性が観測され、アニール後の試料のみ室温垂直磁化を示すことが明らかになった。bcc Co薄膜のナノクラスター化により現れたedge atomsの存在が垂直磁化発現の起源であると思われる。最後に磁気円二色性を利用した光電子顕微鏡による磁気イメージングをSPring-8および独BESSYにて行った。6MLの各成長条件のbcc Co薄膜の磁区構造が互いに大きく異なり、アニール後の試料においては磁区形状が下地Auのステップにそっていることが明らかになる等、bcc Co薄膜の磁気イメージングに初めて成功した。

論文審査の結果の要旨

スピントロニクスデバイスや超高密度磁気記録媒体の開発のためのナノ磁性材料の研究が近年盛んに行われている。磁性体はそのサイズがナノスケールまで小さくなるにつれこれまでに見られなかつた新奇な物性を示すことが知られており、ナノメートル分解能の構造評価を組み合わせたナノ磁性体の磁化分析が必要不可欠となっている。本研究では、ナノテクノロジーへの応用の面だけでなく基礎物理の観点からも関心が高まっている Au (001) 下地上の bcc Co 薄膜のナノスケールでの磁性と構造の相関関係を明らかにすることを目的としている。

まず走査トンネル顕微鏡/分光 (STM/STS) および低速電子線回折 (LEED) を用いて異なる 2 つの成長条件 (室温成長および室温成長後約 230°C アニール) における bcc Co 薄膜の表面構造およびモフォロジーの詳細が調べられた。成長条件が (i) 室温成長の場合には bcc Co が Au (001) 上にエピタキシャル成長し、(ii) 室温成長後 230°C アニールの場合には、ナノクラスターが長方形型に成長することがわかつた。表面構造およびモフォロジーについては STM 像の高さ profile と総蒸着量の見積もりからモデル化を行い、蒸着量が約 3 単原子層 (ML) 以下のアニール後の試料において Au と Co 相の相分離により 5 層の bcc Co から成るクラスターを形成していることが明らかとなつた。最表面には Au と Co の表面自由エネルギーの大きな差 ($\gamma_{\text{Au}}=1.6 \text{ J/m}^2$, $\gamma_{\text{Co}}=2.7 \text{ J/m}^2$) により、下地 Au が表面偏析し Au surfactant layer が存在することが STS 測定より確認され

次にアニール温度や蒸着速度等の成長条件や膜厚を厳密に制御することにより様々なサイズ・形状のナノ構造を作製し、台湾放射光施設 NSRRC にて軟 X 線磁気円二色性 (XMCD) 測定を行い、bcc Co 薄膜の磁気構造の解明を試みた。異なつた膜厚のアニール後の試料の面直磁気モーメントの比較によりクラスターサイズの減少に伴つて磁気異方性を決める軌道磁気モーメントが増加することを明らかにした。1.7 ML のアニール後の試料において見積もられた軌道磁気モーメントの値 $0.29 \text{ [\mu B/atom]}$ より、Pt 基板状の 1 次元状 Co chain ($0.68 \text{ [\mu B/atom]}$) [1] や Co island (約 $0.30 \text{ [\mu B/atom]}$) [2] のように原子配位数 (atomic coordination) の減少が観測された大幅な軌道磁気モーメントの増加に寄与していると考えられる。面直、面内磁気モーメント測定の結果を比較することにより、bcc Co 薄膜のナノクラスター化により現れたクラスターの edge atoms の存在が垂直磁化、core atoms が面内磁化の発現の起源であると結論づけた。最後に磁気円二色性を利用した光電子顕微鏡による磁気イメージング (XMCD-PEEM) を Spring-8 および独 BESSY にて行い、面内磁化を示す core atoms の磁化情報 (磁区構造、面内容易磁化方向) の解明を試みた。6 ML のアニール後の bcc Co 薄膜において磁区構造が Au のステップに沿つて形成されていることが観測され、面内容易磁化方向がこれまでの報告されている [100] 方向 [3] から 45° ずれた [110] 方向に存在することが明らかとなつた。

以上より STM、XMCD、XMCD-PEEM というナノスケールでの構造、磁化分析手法を有機的に組み合わせた総合的な手法を初めて確立することにより金で被覆された bcc Co 薄膜のナノ構造と磁性を解明し、ナノ構造が磁性を発現する機構を明らかにした。今回見いだした強磁性 Co ナノ構造が示す多様性は今後のデバイス開発の基礎研究として極めて重要な貢献であり、博士 (理学) の学位論文として価値あるものと認める。